
Last words

斎藤一樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L a s t w o r d s

【Nコード】

N 8 4 6 6 Y

【作者名】

斎藤一樹

【あらすじ】

学校一の美少女と噂される、白鳥百合。生まれつき心臓が悪い彼女は、平凡な僕の恋人だった……。

L a s t W o r d s - 0 1 (前書き)

一年ぐらい前に書いた作品（未公開）のリメイク版です。短期集中連載で、2011年中に完結する予定です。

世界観をDailyシリーズと共有しており、別のDailyシリーズにもこの作品のキャラが登場します。

幼い頃、僕の大切な女の子が死んでしまった。尤も幼いとは言え、小学四年生の時の事だったので、そこまで幼かったわけでも無いが、彼女は僕にとって掛け替えの無い親友であり、幼なじみであり、初恋の相手でもあり、そして、

……僕の、恋人だった。白鳥百合という名前の彼女は、生まれつき心臓が弱く、体育の授業は基本的にいつも見学していた。

彼女はその年代の女の子にしては珍しく、可愛いというよりも綺麗といった形容が似合う容姿をしていた。身体が弱い、ということも相まって、どこか儚げな印象があった。

そういったわけもあり、また彼女は誰にでも優しくだったので、彼女はクラスのアイドルのような存在だった。小学三年生ぐらいになると、皆異性の事を意識し始める。彼女に告白した男子は数え切れない程いたが（学年の男子の半分ぐらいが告白したのではないだろうか）、彼女が誰かと付き合っているという噂を聞いたものは誰もいなかった。

そんなある日、僕は彼女と日直で一緒になった。その日の放課後、僕は彼女と二人切りで黒板掃除（日直の仕事）をやっていた。教室には、僕たち二人以外には誰も居ない。

彼女は僕に色々と話し掛けてくれる。でも僕は照れ臭くて、更に緊張も手伝って「ああ」とか「うん」とか、無愛想な答えしか返すことが出来なかった。

程なくして、黒板掃除は終わった。僕は黒板消しを置いて、自分の席へランドセルを取りに行こうとした。

そんな時だった。僕の背中に、声が投げ掛けられた。

「…ねえ、あたしと話していて、楽しくなかった？」

その一言に、僕は内心とても慌てた。そんなつもりはない、そう言おうとした。

しかし、白鳥は僕の言葉を聞かず、更にまた僕に言葉を投げ掛けた。

「…ねえ、もしかして伊達君って、あたしの事、……キライ？」

「…そんな事は無い！」

反射的にそう、言葉が口を突いて出ていた。少し、怒鳴るような口調になってしまった。しかし、とっさに出た言葉ではあったが、その実、この言葉は紛れもなく僕の本心である。

「じゃあ、……あたしのこと、」

白鳥は、その先を口にすることを躊躇うかのように言葉を切り、そして決意したのか、更に言葉を重ねる。

「……………好き？」

背中越しに見遣ると、彼女は心細げな、そして不安そうな表情でこちらを見ていた。その姿は、拒絶されることを恐れているかのよう。

振り返り、僕は白鳥に向き直った。嫌いである訳がない。彼女がアイドルのごとき扱いを受けていたのは前に述べた通りである。勿論僕も、彼女に告白こそしていないものの、彼女の事が好きだった。だから、彼女に向き直り、その目を見据えて、はっきりと告げる。

「僕は、白鳥のことが……好きだ」

たぶんこれは、いつまでも決して揺らがない想い。それを言葉に乗せて、彼女へと贈る。

「だ、伊達君！」

リンゴ飴のように真っ赤になった顔を落ち着けるかのように深呼吸をすると、白鳥は僕の名を呼んだ。そして。

「あたしも、その、伊達君のことが好きです。だから……あたしと、っ、付き合って下さいっ！」

……頭の中、ショートするかと思った。

翌日。朝起きると、すぐに昨日の放課後のことを思い出した。知らず、頬が熱を持った。取り敢えずベッドから抜け出し、着替えを始める。

白鳥からの告白は、もちろんOKした。

帰り道は、一緒に並んで歩いた。やっぱり相変わらず僕は照れくさくって、少し不愛想になってしまったけれど、それは彼女も同じみたいで、あまり僕達は会話をしなかった。でも、お互いの手は指と指とを絡ませ合い、しっかりと握られていた。

そんな、どこか気恥ずかしくて、それでもどこか胸の奥が暖かくなるような心地よさのある沈黙の中で、僕たちは、少なくとも僕は、確かに幸せだったんだ。

L a s t w o r d s - 0 2 (前書き)

キリのいいところで区切ったので、今回は結構短いです。

彼女に告白されてから、あつという間に二ヶ月が経過した。

その間に僕と彼女は、お互いの家に遊びに行ったり動物園に行ったりと、そんな楽しい日々を過ごしていた。

何の根拠もなかったけど、そんな楽しい日々が、いつまでも続いていくと思っていた。ううん、その幸せが続くことが当然のことだ、思っていた。

だから、僕は気が付かなかった……いや違う、気が付かなかったんじゃない、気が付こうとしなかったんだ。

そんな幸せな日常の終焉を告げる足音が、少しずつ迫っていることに。

その日は、よく晴れた日曜日だった。僕と白鳥は近くの水族館に行き、例によってデート。水槽の壁の近くまで泳いで寄ってきたウミガメにはしゃいだり、アシカショーに興奮したりと、白鳥は終始楽しげだった。そして、その笑顔をすぐそばで見続けていることが出来た僕もまた、このデートを楽しんでいた。

日が傾き始めてから数時間が経ち、空が朱に染まり始めた頃。

「また明日、学校で」

白鳥の家の玄関前まで彼女を送って、別れ際にこう言っと、

「今日はありがとうね、伊達君」

語尾にハートマークが付きそうな声でそう言って、彼女は僕の唇に、そっとキスをした。

体感時間で一分間ほど。多分、実際にはそんなに長くなかったの
だろう。

彼女も恥ずかしかったのか、頬を朱く染めながら、照れ隠しのよ
うに

「じゃ、じゃあ、また明日ね!」

と言って、タタツと小走りに家の中に入って行ってしまった。

彼女が去って行った後も、しばらく僕は呆然と立ち尽くしていた。

「……今のって」

呟きつつ、唇の、先ほど触れ合わされた場所を、そつと指で押さ
えた。

「……やっぱり、ファーストキス……?」

ファーストキスはレモン味、とか聞くけれど、緊張で味わうどこ
ろじゃあなかった。

L a s t w o r d s - 0 2 (後 書 き)

次回、物語が動きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8466y/>

Last words

2011年11月27日12時48分発行